飯綱町立 三水小学校	明日へ	平成３０年１２月２１日 学校だより第１３号 文責：山田

大人の都合と子どもの気持ち

＜給食時の楽しい話＞

少し前、給食を食べている時に、１年生の子どもたちが楽しい話をしていました。

「わたしのうちはえんとつがないから、サンタさんがはいれないから、こないんだよ」

「こんど、サンタさんがくるのをねないでみてようかな。ずっとおきていて」

「いちどみちゃうと、サンタさんはこないんだよ」

「いいこにしているところしか、きてくれないんだって」

「ぼくは、もうサンタさんにおねがいするのきまってんだ」

子どもたちは給食そっちのけで話に夢中になっていました。まもなく訪れる日を、とても楽しみにしているようです。話を聞いていて思わず笑顔になってしまいますね。

そんな子どもたちが、「校長先生、校長室に遊びに行ってもいいですか」と言ってきたことがありました。本校の校長室は、校長専用の部屋であると同時に応接室も兼ねていますので、お客さんが来ても対応できるように広くなっています。その時は「いいよ」と即答したものの、それからしばらく出張や私用等で学校を空けることが多く、楽しみにしていた子どもたちの気持ちを削いでしまったと反省しています。子どもたちの純粋な気持ちを大切にできるように、今後気をつけたいと思います。

＜「ねえ、サンタクロースって本当にいるの？」＞

子どもたちが必ず家の方に尋ねる質問の一つかと思います。皆さんはどのように答えますか、またはどのように答えてきましたか。「いるよ」「いるんじゃない」と言えば、「どこにいるの」「いつ会えるの」と更に突っ込まれます。「いないんだよ」「あれはお話の中に出てくるんだよ」と言うと、子どもたちの純粋な気持ちを壊してしまうようで何となく気が引けます。また「でもテレビで見たよ」と言われるかもしれません。実際にテレビや本などに登場し、衣装を着た人たちも町にあふれていますから。あるいは「知らない」「先生に聞いてみたら」としますか……。

今から１２１年前の１８９７年。当時８歳のヴァージニア・オハンロンという少女が、アメリカ・ニューヨークにあるサン新聞編集部に、ある投書をしました。

DEAR EDITOR ：I am 8 years old.
Some of my little friends say there is no Santa Claus.
Papa says, 'If you see it in THE SUN it's so.'
Please tell me the truth; is there a Santa Claus?

編集部さんへ：私は８歳の女の子です。
私の友だちは、サンタはいないんだっていいます。
パパは『サン新聞に書いてあるなら、その通りだよ』って言います。
だから、本当のことを教えてください。サンタクロースはいるんですか」

当時、サン新聞の論説委員だったフランシス・チャーチ氏は、１８９７年９月２１日付の社説の中で、次のように答えました。以下はその抜粋です。

VIRGINIA, your little friends are wrong. They have been affected by the skepticism of a skeptical age. They do not believe except they see. They think that nothing can be which is not comprehensible by their little minds. All minds, Virginia, whether they be men's or children's, are little. In this great universe of ours man is a mere insect, an ant, in his intellect, as compared with the boundless world about him, as measured by the intelligence capable of grasping the whole of truth and knowledge.
Yes, VIRGINIA, there is a Santa Claus. He exists as certainly as love and generosity and devotion exist, and you know that they abound and give to your life its highest beauty and joy.（後略）

ヴァージニア、それは友だちの方がまちがっているよ。きっと、何でも疑いたがる年ごろで、見たことがないと信じられないんだね。自分のわかることだけが全部だと思ってるんだろう。

でもねヴァージニア、大人でも子どもでも、全部がわかるわけじゃない。この広い宇宙では、人間って小さな小さなものなんだ。ぼくたちには、この世界のほんの少しのことしかわからないし、本当のことを全部わかろうとするには、まだまだなんだ。

そう、ヴァージニア、サンタクロースはいるんだよ。「愛」「思いやり」「いたわり」とかがちゃんとあるように、サンタクロースもちゃんといるし、愛もサンタクロースも、ぼくらに輝きを与えてくれるのです。（後略）

目に見える物しか信じようとしない悲しさ、目に見えない物でも確かにあること、不変であること、そしてそれを信じることはすばらしいことだということを新聞で伝えました。８歳だったヴァージニアさんは、この返事をどう受け取ったでしょうか。彼女はその後小学校の教師になり、入院生活を送っている子どもたちの学校の副校長や公立学校の校長も勤めています。１９７１年に、ヴァージニアさんが８１歳で亡くなった時、ニューヨーク・タイムズ紙は「サンタの友だちヴァージニア」という記事を掲載しています。１２１年たった今でもこの話は新聞社が取り上げ、語り継がれています。８歳のヴァージニアさんの質問に、当時もし別の答えが返ってきていたらその後の人生は全く違っていたかもしれません。普段生意気なことを言っていても、心は純粋、繊細で折れやすく、まるでガラス製品のような子どもたちは、私たち大人が対応しているとおりに育っていきます。それだけに、私たち大人の責任は重くなります。バージニアさんとサン新聞とのこのやり取りは、毎年この時期に話題にのぼりますが、心温まる話であると同時に、私たち大人が今までを振り返るきっかけとなっているように思います。現在小学生の子どもたちが１０数年後、父親母親になると、同じ質問を自分たちの子どもからされることでしょう。皆さんが、こうした質問をされた時、どのように答えますか、またどのように答えてきましたか。